

第4回感想文コンクール【優秀賞】5作品

「子どもたちへ」を読んで

小学校6年生

私はこの「子どもたちへ」は前にも読んだことがあります。6年生になって読むと前よりこの本の意味が深く分かりました。

本の中に私の知っている人物もいました。今まで分かったような気がしていた事も違ったりまた新しいことを知ったりたくさん発見がありました。特に「ポーランド孤児を救った日本人たち」はとっても感動しました。孤児たちは1人も死者を出さなかったが日本人の中には孤児たちの看病に命をささげた人もいます。

前にも言ったように私はこの本を以前にも読んだことがあります。「5庄屋」川の流れるをゆるやかにして水を引くことに命をかけた人たちの話です。

私だったらわざわざ命をかけてまで川の流れるをゆるやかにしなかったと思います。

この本の中には命をかけてみんなのために何かをした人々や人をたすけたりした人、大きな発見をした人どれも人々にうれしいことやよいことをしたばかりです。どの人もみんなすごい人です。私もそんなすごい人たちを見習いたいものです。私はそのために一番大切なのは気持ちだと思います。まずは心の中にがんばろう、やろうと思う気持ちが大切そして勇気と行動最後は自分が動かなければいけません自分で考え自分で行動しなければならぬそれができる人になりたいです。

私は子どもだけでなく大人の人たちにも読んでほしいと思いました。だから題名を「子どもたちへ」じゃなくてちがう題名のほうがよかったと思います。

私はこの本を読んで2つのことを知りました。一つ目は人のため、なにかのために何かをすると必ずおかしがあるこれはたぶんすべての話の中に必ずあると思います。

二つ目は自分の考えをはっきり持つことこれはある一話の話でしかはっきりとは言えないけれどもどの人も決心してそのための目標に向かってゆく目標や中心がないかぎりすすめないと思いました。

この二つはいろいろ自分の考えをつけくわえています。でもきっとどの人たちにも同じ考えがあったと思います。もちろん私もこの本を読んで考えました。

私はこの本を読んで学んだこと知ったことを心のどこかにおいてこの本でのことがこれからの生活に生かしていきよりよい自分とみんなを作りたいです。

「きずなと協力」

小学校 6 年生

私がこの本で感動したのは第 6 話の「厳冬期の富士山気象観測に挑む」です。私はこの話で、協力することの大切さ、誰かのことを信じて一緒に成し遂げることの深さを教わりました。そう思ったのはやはり主人公の千代子さんの存在があったからです。又、野中夫妻の固いきずなを感じたからでもあります。

そもそも。まず不可能だろうと言われていた 3 千メートル級の高山で観測しようとした野中到さんの意志の強さにもおどろかされました。まだ誰も挑戦していないことをやってやろうなんて私は一度も考えていなかったからです。しかも、冬期の観測なんて九州の温かい地方で育った私には全体に無理なことではないかなと思います。しかし、野中到さんはこの強い意思で一度登山に失敗していながら 2 度目は見事登ることに成功したのです。

今も昔も、野中到さんの強い意思にたくさんの方が心動かされたのでしょうか。野中到さんのことが新聞で報道されると慰問隊まで出来てしまったと聞いて私はそう思いました。そんな中野到さんでも観測所から見る山下は暗黒地獄のように真っ暗で不安もかなりあったのではないかと思います。また、周囲も観測は不可能だと思われていたのに続けることができたのは、やはり妻・千代子さんの存在があったからだだと思います。

到さんの意志も強ければ、千代子さんの意思は 2 倍強いのではないかと私は思いました。到さんを助けるため博多に帰るたびに背振山などで足腰をきたえ準備していたこと、女性の出る幕ではないという周囲の見方を知っていながら登山に挑んだこと。千代子さんの行動全てがそう思った理由です。そして何より千代子さんがとみこさんにあてた手紙の「多くの人たち、とくに到さんからはどんなにしかれようとやめるわけにはいきませんので、」の文から千代子さんは本当に到さんを愛し強い意思の持ち主なんだなあと思います。

そして千代子が到と協力しながら観測を続けていながらも厳冬期は猛威をふるいます。多くの計器が使用できなくなり、二人も相次いで凍傷や高山病にかかりながらも堅いきずなで観測を続けました。

私はこんな二人のきずなが今の気象予報の発展に大きくこうけんしているんだなあと思いました。私には気象予報こそできませんが、二人の中にあった固いきずなと協力、強い意思を大切にしてこれからの学校生活を過ごしていきたいと思います。

「オープンマインド」

小学校5年生

僕は、「子供たちへ」 —歴史に学ぶ思いやりの心— という本の中、第一話「エルトゥール号救出物語」～日本・トルコ交流の歴史～を読んで「オープンマインド」という言葉を知った。以前トルコ大使だった遠山敦子さんの言葉だが、これは「人を助ける優しさやあたたかい心」という意味だ。この言葉に僕は強く引き付けられたのだ。

本では、1890年に、和歌山県沖の海で、トルコの船のエルトゥール号が、台風で沈没した。その時に大島の人達は荒海の中を命がけで救助した。その様子は本には次のように書いてある。「実際に、遭難現場の近くの大島の檜野崎から見おろす「2百尺の断崖」は、約60mほどの息をのむような崖です。にもかかわらず、高野さんたちは深い傷を受けたトルコ人たちを帯を包帯代わりにして応急の処置を行い、おんぶして断崖をよじ登ったのです。こうして、海岸から引き上げて助けたものの、トルコの人たちは重傷の上に、からだは海岸につかっていたため、すっかり冷え切っていました。島民は衣服を脱いでトルコ人たちを抱き、自分の体温であたためたそうです。」

もし僕が大島の人達だったら、とてもそんな勇氣はないだろう。大島の人達はみんな協力して、トルコの人達に自分の食べ物を分けてあげたり看護したりして、目に見えない優しさであたたかい心で接したのだ。

また1985年に、イラクがイラン上空を飛ぶ飛行機はどの国のものでも攻撃すると警告した。イランの首都テヘランなどでは日本人が住んでいて、警告を聞くとすぐさま帰国の準備に入った。空港に着くと多くの人々がいたため飛行機に乗れず途方にくれていた時、トルコ大使館から飛行機を出してくれるという申し出があり、日本人は助かった。トルコの人達は1890年のおよそおよそ100年も前の出来事を決して忘れていなかったのだ。

今、現在たくさんの方が戦争をしている。国と国、人と人が争い、罪もないのに殺されるという、悲惨な事件が多い。どうしてだろうかと考えてしまう。そんな人たちの心には「オープンマインド」はないのだろうか疑問に思った。

相手を思いやる心の大切さ少しでも多くの人達が持つことによって、平和にくらせるのではないだろうか。それにはまず僕自身の心が「オープンマインド」にならなくてはと思う。振り返ってみると、僕にも少しはあるような気がする。

ある日、ちょっとした事で、僕と友人がけんかをした。僕と友人が暴言をはきながら、絶対僕のほうが正しいと意見を曲げなかった。なかなかゆずらなかった。その時の気持は、「負けてたまるか。」「絶対自分のほうが正しい。」と思っていた。でもとうとう僕は「ごめんね。」と謝った。友達も「ごめんね。」と謝った。謝ったら心があたたかくなった。今までのことを忘れた。いつのまにか仲直りしてたくさん遊んだ。意見がちがっても。相手の気持になって考えることが大事だと思う。そうなった時、僕のまわりには「オープンマインド」の花が咲くだろう。

「オープンマインドの心」

小学校 6 年生

今から 21 年前の 1985 年 3 月、イランとイラクは戦争をしていました。両国とも重要な都市を攻撃する事はさけていましたが、イラクはついにイランの首都テヘランを攻撃することを決めました。そのころテヘランには日本人も住んでいて、もちろん急いで飛行機で逃げようとしていました。しかし、空港には人が多く集まって、なかなか座席が取れません。

攻撃が始まるまであと 24 時間を切った時、トルコの大使館から飛行機の座席を日本人に割り当ててくれるという連絡がありました。こうして無事、日本人全員がテヘランから逃げる事ができたのです。でも、どうしてトルコは日本人を助けてくれたのでしょうか。

私がこの物語を選んだのは、世界地図をみると、なんと 8,700 キロもはなれているトルコと日本がどうして関わったのか不思議に思ったからです。読んでみて私は驚きました。

日本とトルコの人々の交流の始まりは、1890 年のエルトゥールル号の海難事故でした。トルコの使節団を乗せたエルトゥールル号は台風のため、和歌山県の海で遭難してしまいます。しかし、エルトゥールル号の事故を知った大島という島の人々が、一生懸命救助をしてトルコ人を助けたのです。

今のように電話もなく自分たちも台風の影響を受けているのに、自分たちの帯を包帯がわりにして、トルコ人を精いっぱい看病したそうです。

エルトゥールル号が事故にあう 4 年前、イギリス貨物船ノルマントン号の事件がおきています。船長とイギリス人だけが沈没した船から脱出した時、乗っていた日本人を見捨てていったという悲しい事件です。大島の人たちはこの事を知っていたはずですが、それなのにその国の人かどこの国の人か関係なく、トルコの人たちを助けたのです。大島の人々の心がどんなにあたたかくてやさしいか分かります。そんな大島の人々を、あとで、文部科学大臣だった遠山敦子さんという人は、こんな言葉で表していました。それは「オープンマインド」。「世界に向かって開かれた広い心」という意味です。

エルトゥールル号の遭難事故から 95 年、今度はテヘランで困っている日本人が助けられました。大島の人々がトルコの人々を助けたあの心は、大島の人々が亡くなってもずっとトルコの人々の心の中に行き続けているんだと思いました。

私はこの物語を読んでよかったと思います。今、世界で国と国が争っている所もある中で、日本とトルコの間にあるつながりに気づけたからです。大島の人々のオープンマインドの心をこれから大切にしていきたいと思います。

日本で最初に赤十字精神を実行したのは、福岡県出身の医師、高松凌雲であったそうです。わたしは初めて凌雲のことを知りました。担任の先生が、凌雲について書かれた本をコピーして下さり、それを家で音読したのです。

時は、明治時代に入ったばかりの1869年。旧幕府軍と官軍との最後の戦いが行われるころ凌雲は、箱館病院の頭取という役目に任命されました。そこで凌雲は、「たとえ敵であってもきずついた人々ならば公平に治りょうにあたるのは当然のことだ。」とパリで学んだ精神をうったえました。その当時収容されていた負しゅう者の中には、にくい敵とみて切る。という動きがみられたためです。また、官軍が病院内に入り、幕府軍側の負しゅう者を切る行いが出たならば説得し、それでも聞かないのならば、負しゅう者と命を共にするつもりだったのです。

修学旅行の時、キリスト教の学校に通っているわたしは、教会へ行き神父様のお話を何度も聞かせていただきました。キリスト教信者の方の行いに本当に心をうたれました。60年前、アメリカとの戦争で焼けてなくなった人々のことを勉強したばかりだったので、神父様のお言葉が一つ一つ心にしみこんでゆくのです。凌雲が負しゅう者と命を共にする覚ごは、神父様の言葉を思い出させてくれました。

みだれていた人々のむねにもしみわたるほどの凌雲の心からのうったえはどれほど強く納得するものだろうかと思います。正しい判断をもち続け、周囲を説得し、きずついた人々に対応することはとてもむずかしいことでしょう。なぜならいっしょに治りょうする医師たちが、凌雲のアドバイスに、ちっとも耳をかさなかったからです。それでも、病院の責任者として、強く正しい行いをやりとげた凌雲のあり方がとても心に残りました。一人の医師として生きる決意を最後までゆるがせない、強い意志がすごいと思います。凌雲は、後の世に生まれてくる人々が身につけなければならない、利害関係にとらわれず自分の意思で正しい行いをやりとげるということをお手本として残してくれたのだと感じます。

貧しい人々のために誠実に働く。勉強にはげみ、世の中の役に立とうという凌雲の心を、音読を通して学びました。わたしも学校生活の中などで、今の生活に感謝しながら、今も世界中にあふれているめぐまれない人々のことに思いを寄せて、くらしたいと思います。